

書評『韓国で起きたこと、日本で起きるかもしれないこと』（『むくげ通信』285号、2017.11.26）
高木望著（彩流社）

川那辺 康一



本書の「韓国で起きたこと、日本で起きるかもしれないこと」（彩流社、税抜き1,600円）は、2017年3月に朴槿恵大統領を国民が罷免に追い込んだいわゆる「キャンドル革命」について書かれている。2017年5月出版された。

著者の高木望氏は、1953年生まれ、ソウル市在住のフリーライターである。

著者は、今回の韓国で起きた「キャンドル革命」について、国民が主体となった民主主義の実現という意味で、今回の「キャンドル革命」はこれまで世界で実現していない平和と民主主義のモデルケースとして、世界中から高い評価を受けている。終始一貫、合法的な秩序を守り、公式発表では逮捕者も負傷者も出さず、不正を犯した大統領を罷免し、政権交代を実現したことは、世界に類例を見ない国民の偉大な勝利として歴史に刻まれるだろう（P97）。と述べている。

本書は、このような平和裏に政権交代を成し遂げた「キャンドル革命」は、どのようにしてなされたのか。問題の発覚から国民の怒りが高まりつつも非暴力に徹した運動を経て大統領の罷免に至るまでの内容を時系列的に日誌のごとく非常に詳細に綴っている。

事件の切掛けは、2016年夏、保守言論の最大手として君臨してきた「朝鮮日報」と同社が経営する「TV朝鮮」が相次いで青瓦台（大統領府）高官の不正疑惑を報じて衝撃を与えた（P15）。

さらに、9月から10月にかけて「ミル財団」、「Kスポーツ財団」という聞きなれない組織に、財閥グループが巨額の不正献金をし、その背後に「崔順実（チェンシル）」という民間人の存在があることを追求する報道が「TV朝鮮」から別のメディアに引き継がれて国民の関心を呼び起こし続けた（P15）。

上記の二つの財団をめぐる疑惑が次々に浮かびあがるとともに、崔順実の娘であるチョン・ユラが馬術選手として異例の特別待遇を受けていたこと、特に私立女子大の名門である梨花女子大学と、成績評価にも特別な配慮がなされていることが暴露された（P16）。

10月24日の午後8時の「JTBニュースルーム」は「今回JTBCは崔順実氏のコンピューターファイルを入手し、その内容を分析した結果、大統領の演説に関する44個のファイルを発見した。しかもそのファイルを崔順実が受け取った時点はいずれも大統領が演説を行う前のことだったことが確認された」（P17）

10月25日には、大統領の「国民への謝罪」が発表され、文章流失が実際は最近まで続いていることもわかった（P18）。謝罪にもならない自己弁護に終始した大統領に、国民の怒りは沸点を迎えるようとしていた（P19）。

10月最後の土曜日である29日には清渓広場を中心にして3万人の市民が集まった。これが第一次キャンドル集会となる。集会に初めて参加する人も多く、雰囲気に慣れるまでは少し時間が必要だった（P23）。この日の主人公は今まで一度もデモしたことがない、「沈黙する大衆」と見られていた様々な階層の市民だった。最初のキャンドル集会は結局一人の逮捕者もけが人も出ことなく、無事にその日の予定を終えた（P26）。この日の集会とデモの基調はその後、毎週土曜日に行われたすべての集会の性格を決定づけたように思える。

この10月29日から134日間にわたって休みなく続いた運動が、大統領を罷免に追い込むことになる。

11月2日の夜には、朴元淳（パクウォンスン）ソウル市長が初めてキャンドルを手にして市民と一緒に座りこみ、集会後のインタビューで、「今日のこの1本のロウソクの灯りが、明日のわが国の未来を照らす、明るい光になってくれることを望む」という言葉を伝えた（P28）。

11月5日、第2次キャンドル集会が開かれ、ソウルで20万人、各地で10万人の市民が集まった。この日は、風刺や諧謔に満ちたパフォーマンスは舞台を離れて、集会のあちこちで演じられた。一国の大統領が民間人に過ぎな

い崔順実の操り人形だったという事実は羞恥や憤怒を通り越して、国民の精神を破壊に導くほど大きな打撃だった。

11月12日、第3次キャンドル集会は、労働者組織を中心、「民衆総決起 2016年第3次集会」として準備されたことに加え、野党が正式に参加を表明していた(P36)ことから、ソウルで100万人、各地で10万人の市民が集まった。

11月19日、第4次キャンドル集会では、集会に対してパクサモと呼ばれる人達のカウンター集会が開かれたことが伝えられていたが、警察の厳重な警戒と遮断作戦によって、市民同士の衝突は最後まで回避された。

このように毎週のように市民たちが広場に集い、退陣を迫る声を力の限り叫んでも耳を貸さない大統領に対して、残された合法的な方法は「弾劾裁判」にかけて罷免することしかなかった。

一般的な弾劾裁判は、国会議員の3分の1以上の要求で発議され、過半数の賛成で可決される。だが大統領が対象の場合はさらに要件が厳しくなって、全議員の過半数の要求があって発議が可能になり、議決では全体の3分の2以上の賛成がなければ可決されない。そして一度否決されれば、逆に大統領に免罪符を与えることになりかねなかった。

11月21日に最大野党の「共に民主党」が党議として弾劾訴追方針を決定、24日には野党3党が共同で訴追案を提出することに合意した(P47)。

11月26日、第5次キャンドル集会では、ソウルはみぞれまじりの雪となったが、150万人の市民が、各地でも40万人の市民が参加した。これらの市民に対し、各紙では、飲食の無料提供や「下野パン」など時局を風刺する商品を販売する経営者の様々なアイデアを紹介した記事が共感を呼んだ(P54)。

11月29日、大統領より「国民談話」が発表され、退陣ではなく、自分の「進退問題を国会の決定に任せる」との内容に、市民は失望した。

12月3日、第6次キャンドル集会では「国民談話」の失望感からソウルで170万人、各地で62万1千人の参加があった。この参加者数は、韓国現代史の中でも最多の参加者数となった(P63)。

12月9日、国会は朴大統領の弾劾訴追案を可決した。賛成234票、反対56票、棄権2、無効7という結果だった。発議に名を連ねた野党、無所属を含めた172名が全員賛成票を投じたとしたら、セヌリ党から62名の造反者が出来ることになる。

12月10日、第7次キャンドル集会では、前日の弾劾訴追案可決により、市民の足取りは心なしか軽くなったように見えたが、まだ、「憲法裁判所」の判断が残されていたこと

から、その後押しも含めソウルで80万、各地で24万3千4百の市民が集まった。

12月17日、第8次キャンドル集会では、ソウル65万人、各地12万2千5百人、12月24日、第9次キャンドル集会では、ソウル60万人、各地10万1千8百人。12月31日、第10次キャンドル集会では、ソウル100万人、各地10万4千人、と年内の退陣を求めて、寒さにも関わらず多くの市民が参加した。

年が変わり2017年1月7日の第11次キャンドル集会から3月4日の第19次キャンドル集会まで同様に毎週土曜日続けられたが、3月10日、ついに「憲法裁判所」が8人の裁判官全員の一致で朴大統領の罷免を決定し、翌、3月11日の第20次キャンドル集会は勝利集会となった(実際の集会は23次まで続けられた)。

著者は、連日のキャンドル集会を目録のごとく詳細に記述している。キャンドル集会が行われた空間について、著者は、「広場の民主主義」と呼び、その空間は、世代や思想を超えて市民の心を結ぶ連帯の場となり、社会に山積みした問題の存在を実感し共感の輪を形成する教育の場ともなった。経済的格差の拡大が深刻さを増し、就職も結婚もままならない将来への不安感や、財閥企業の非道徳的な経済活動への不満が、大統領の政治スキャンダルを導火線として一挙に噴出したことが、想像を超える規模の汎国民的運動へと人々を結集させた(P97)と述べている。

著者は、個人ではないノーベル平和賞の受賞は2015年、ジャスミン革命を導いた「国民対話カルテット」という非政府機構に対して、「大きな困難の中で他国の模範となる国民の絆を築いてきた努力」を敬意して投与された例がある。その例に習うなら、「キャンドル革命」の成果は十分に受賞に値するだろう(P98)、と述べている。

そして、隣国で起きた壮大な市民の新しい民主主義の価値を創造する行動に、今、私達も大きな関心を寄せる必要があるのではないか(P98)、と結んでいる。

また、最終章では、実際にキャンドル革命に参加した5人の方の証言も、参加した思いが語られており、大変興味深い内容となっている。

なお、著者は87年にも韓国の民主化運動にも遭遇し、それとの比較の点から書かれているところも興味深い。

日本で、この韓国で起きた「キャンドル革命」について、これほど詳しく書かれた書物は他にないのでないと思われる。その意味においても、歴史的な事件に遭遇した著者が、内容を細かく記述した記録と言った観点からも十分に価値のある一冊であると思う。